

有職父親、母親のサード・プレイスとしての ICT 利用 —未就学児を持つ日本の親の場合—

○佐野 潤子（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所）

1. 研究の目的

スマートフォンの特徴として、1人が1台持つ情報端末であることが挙げられる。通信利用動向調査を基に、個人のスマートフォンの保有率の推移をみると、2011年に14.6%であったものが、2016年には56.8%と5年間で4倍に上昇している（平成29年度版情報通信白書）。特に20代、30代では保有率が90%を超えており、利用法は多岐にわたり生活の中心になりつつある。未就学児の子どもを持つ母親のスマートフォン使用率は2013年60.5%から2017年は92.4%と1.5倍になっている（ベネッセ教育総合研究所2017）。これほどまでに育児中の母親のICT利用が活発なのはなぜか。母親のICT利用についてOldenburg（1989）の“The Third Place”の概念を援用し、母親のICT利用がサード・プレイスとして機能しているのか、機能する要因は何かを明らかにする。同時に日本の未就学児を持つ父親と比較し、考察する。

2. 対象と方法

本研究で使用するデータは科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号26242004、研究代表者 お茶の水女子大学教授 石井クンツ昌子）により実施された「IT社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」（日本2016年）において収集したインターネット調査データである。本研究では、日本の未就学児を持つ有職の母親と父親を対象にし、母親323人、父親1218人（休業中は除く）である。分析はパスモデルを用いた多母集団比較分析を行った。

（分析にあたりお茶の水女子大学基幹研究院人間科学系石井クンツ昌子教授を代表とする科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号2624004）の個票データの提供を受けた。心より感謝申し上げます。）

3. 結果と考察

分析の結果、母親の場合、子育て情報などを集めるためのICT利用の頻度が高いほど、ICT利用はストレス解消であるという認識になっていた。配偶者、親、友人に直接会って話すなどの「直接コミュニケーションネットワーク」や、ICT利用を通じた配偶者や親、友人とのコミュニケーションである「ICTコミュニケーションネットワーク」は母親のICT利用がストレス解消になっていることに有意に関わらなかった。一方、父親は母親と同様、ICT利用で子育て情報を集めているほど、またその他にICTを通じた友人のコミュニケーションネットワークがあること、さらに配偶者の直接コミュニケーションがあるほどICT利用はストレス解消になっていた。逆に友人の直接コミュニケーションネットワークがあるほど、ICT利用がストレス解消であるという認識が低かった。未就学児がいる子育て期の父親、母親はともにICT利用で子育てに関する有益な情報を集め、活用し、有実感を実感できる満足感からか、ICT利用はストレス解消になっていることが考えられる。一方母親はICT利用以外にストレス解消の場（手段）がある可能性が示唆された。父親はICT利用で子育ての関する友人のコミュニケーションネットワークや配偶者とのコミュニケーションがあるほどICT利用をストレス解消になっていることから、子育てに関して自分以外の人からの情報やサポートに影響を受けていることが考えられる。

キーワード：ICT利用 サード・プレイス 配偶者・親・友人コミュニケーションネットワーク